

## チャレンジセンターにおける挑み力の教育について

### 実施報告

日時： 10月1日（水） 15：15～16:45

場所： プロジェクト室5（8号館4階）

参加者： チャレンジセンター教員 6名  
チャレンジセンター推進室職員 1名

15:20～15:40

### 1. 挑み力(入門)での取り組みについて 挑み力(入門)での学習について

発表者 堀本 麻由子

#### 【発表内容】

挑み力（入門）での、授業の狙い、授業方法、特徴、成果と課題について発表があった。

挑み力の教育目標の中の、問題発見、構想力という点を重視し、生涯学習論から「学習観」に注目するプログラムを行っている。まず、多様な学習のあり方を認識した上で、子どもとおとなの学習の方法の違いを知る。その上で、自分の学習観を振り返り、最終的には自分自身の学習観を見出し、学習観の転換のきっかけを作る内容になっている。これにより、自己成長を促進すると考えている。学習の前半では、ビデオ教材を使い、ケースを説明する中で、多様な学び方を認識させる。小学校、中学校での学びを振り返らせる。さらに、ゲストスピーカーを招き、多様な学びを知らせることで、自らの学びの揺らぎを起こす。毎回、A41枚程度の振り返りを通し、学びの定着をはかる。最終的には、ワールドカフェによるワークショップを経て、授業のまとめを行う。百数十名の学生に対し行うことから、講義中心ではあるが、多くの視点を獲得させるために、まとめとしてワールドカフェを用いている。授業内で重視することは、学びのプロセスであり、経験の中からいかに学ぶかを重視している。パブリック・アチーブメントとの関連性については、自分の課題を自分自身で見つけ学習項目を設定する点や学びのプロセスを重視する点、経験の中からいかに学ぶかを考える点などは共通する項目であり、発達心理学、生涯学習論などの理論的背景からこれらの点を学ぶことは、社会生活の中でいかに自身を成長させるかというパブリック・アチーブメントの基本的な視点と共通するものである。具体的にはNPO活動やボランティア活動からいかに学ぶかという中で、自身の学習観を振り返り、新たな学びを開発する力は、基礎的な力として考えることができる。成果と課題としては、学生が書いたものなどから、学生の自らの学習への振り返りはキザでキザな事になることがわかる。アルバイトや授業だけでなく、様々な経験からどのように学ぶかを考えるきっかけには十分になっている。また、映画を教材にしたことやゲストスピーカーは学生からとても好評である。自分で学習課題を発見させるという授業の狙いを達成するには十分な内容と考えるが、課題としては、百数十名の多人数の授業であるため、グループワークなどの体験学習を取り入れることが難しく、後半で実施するワールドカフェも、イベント的な位置づけになっている部分がある。

(質疑応答 15:40~15:50)

質問：学生からは、「挑み力」という言葉と「学習観を振り返る」という点を結び付けるためにどのような説明をしているか（園田）

堀本：授業で育成する力やスキルなどを説明する際に、成長していく中で、学ぶことは不可欠な、重要な視点であることを説明している。

コメント：最近学生が、中学受験で勉強することに疲れたといっているのを聞いた。さらに、大学に進学しても、サークルや部活動などで、うまくいかなかったところから、改めて学ぶ意欲を持つ学生もいるようだが、そうではない学生も多い。中でも、不本意入学の学生は、単位の取得もギリギリになりがちで、就職に直面しても、意欲を見いだせない学生たちにとって、自分の学習を考えさせることは非常に有効なのではないか。

堀本：中学、高校までの学びを転換させることが、中学受験や希望する学科に入学できていないということをも自分自身が原因にしてしまっていること自体への気づきになるように、授業に取り組んでいる。

15:50~16:10

## 2. 挑み力(演習A) (演習B) での取り組みについて 挑み力(演習A) (演習B) での学習について

発表者 園田 由紀子

### 【発表内容】

担当する挑み力（演習A）、挑み力（演習B）の演習の内容を中心に説明する。挑み力（演習A）は、シチズンシップを学ぶというテーマの中で、前半は、市販教材を用いて「多文化共生」学ぶ演習を行っている。国際社会の中で複数の文化が共生するという架空世界を題材にしたシミュレーション教材に従い、毎回異なるグループで与えられた多文化における教育問題や集住、自治の問題などを紙芝居形式でわかりやすいものであるが、議論のテーマが重要かつ重いテーマであることから、グループワーク内での教員の介入が重要な内容となっている。この際には、ワークシートを使い、継続的な学習を振り返ることができるように工夫している。毎回学生は、気づいたことや発見したことを、熱心に多数書き込んでくれる学生が多くいる。後半は、より身近な具体的なテーマを設定し、仮想住民会議として、グループの話し合いを行う。これにより、多角的に問題を発見する力を育成し、自らが一市民としてコミュニティに積極的に働きかける重要性を学ぶ。最終的には東海大生が暮らすアパートで起こる近所問題を解決する話し合いを経験し、市民としてどのように地域に関わるべきかを考えてもらう。最終的には、自らが想定する地域を選び、その地域で起こる変化に注目しながら、地域の問題を発見し、共通する問題を想定した学生をグループにして解決策を考える内容となっている。

挑み力（演習B）では、2つの演習を組み合わせで行っている。前半は、東海大学検定を作ろうと言うテーマに基づき、自らが通う大学のすざいとところを調査によって探し、問題を作成する内容になっている。後半は、ギネス記録に挑戦するというテーマを設定し、過去のギネス記録を調査した後、授業内で自らが挑戦する記録を選び、実際に挑戦させる。挑戦する際には、チャレンジシートと言う挑戦内容や方法、目標を設定したシートを作成し、挑戦後の結果を踏まえ、改善策を書いてもらうことを繰り返させた。チャレンジは完全に自主性に任せ、チャレンジ回数は規定しなかったが、チャレンジはビデオでの録画を必須とし、学生で共有できるようにしている。実際に、非公認ではあるが、ギネス記録を更新する学生もおり、積極的に世界一に挑戦している。課題としては、特に（演習B）では、高学年の学生が履修する傾向が高く、意欲の差が著しくなることから、自主性を尊重する演習ばかりで構成することで、学びの差が広がってしまう点が課題となっている。

(質疑応答 16:10～16:20)

質問：前半の多文化共生のプログラムの中で、ヘイトスピーチなどの具体的な内容は取り上げないのか（崔先生）

園田：演習中の介入の中で、外国人に対する偏見などの気づきを促している。具体的な国や事例を用いて、問題として取り上げることは現在していないが、多文化共生をテーマに1コマの授業で運用できるようになれば、そういった点も取り入れていく必要があると考える

16:20～

### 3. ディスカッション

司会 田島 祥

～挑み力での学びについて～

～今後の挑み力における取組について～

～パブリックアーチーブメント、アクティブラーニングとの関係について～

田島先生の司会に基づき、参加者から、挑み力とはどのような教育を行うべきか意見を募った。参加者からは、発表自体があわただしく内容が良く分からなかったなどの指摘はあったものの、チャレンジセンターがこれまで提唱してきた「問題発見力」の重要性の指摘が多く、これについては、参加者がみな、挑み力での必須の学びとして共有できた。また、困難な課題に向き合う姿勢や積極性の育成など、思考だけでなく、試行や実践に向けた態度の変容や自己成長を促す力なども必要なのではないかという指摘も見られた。

16:45～

### 4. 研修会 閉会の挨拶

チャレンジセンター次長  
崔一煥

他の先生が担当する授業内容を聞き、議論することはとても有意義で、挑み力の理解と共有ができたと考える。ただし、開催日時の問題もあるが、センター内、推進室からの参加者が限られていることから、今後は、より多くの人々が参加できるように配慮する必要があるのではないか。今後もこのような取り組みを実施しながら、教育内容を見直していきたい。

16:50 終了